

畿央大学教育学部における初年次教育の意義と課題

関口 洋平

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

The characteristics and issues of the first year-experience in Kio University: A case study of faculty of education

Yohei SEKIGUCHI

Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 本報告は、畿央大学教育学部における初年次教育の実践について、その政策的背景を整理したうえで、2021年度前期の初年次教育の具体的な内容と展開について検討し、畿央大学教育学部において初年次教育がもつ意義と課題について明らかにすることを目的とする。初年次学生を対象とするアンケート調査の検討を通じて、初年次学生はベーシックセミナーにおいて論理的な文章に関する知識やスキルについて課題を通じて実践的に学ぶとともに、キャリア形成セミナーでは将来的な進路を考えるうえで視野を広げ、職業観について一定程度の知識や多様な見方を獲得した学生が多く存在することが示された。

Keywords：初年次教育，高等教育，ユニバーサル化，アカデミック・スキル，キャリアデザイン

はじめに

近年、日本では、私立大学をはじめとして多くの大学において初年次教育が展開されてきている。そこでは初年次教育の内容の多様化を基調としながらも、ユニバーサル段階へと至る高等教育の量的な拡大と学生の多様化をうけて、全体として初年次の大学生に対する「学習への適応」と「社会への適応」とが重視されるようになってきている。

こうしたなか、畿央大学教育学部においても主として一回生を対象とするベーシックセミナー及びキャリア形成セミナーという授業科目を通じて初年次教育が実践されてきている。しかしながら、2019年以前の初年次教育の実践に筆者は直接関与したことがないためこれは伝聞となるが、従来、両科目における学びの内容が必ずしも体系的でなかったことが課題とされてきた。その主たる要因の1つは、とりわけベーシックセミナーとキャリア形成セミナーを担当する教員が固定されておらず、慣習的に各年度の一回生を担当する教員のうち、その代表が初年次教育に関わる授業内容について責任をもつという体制が採られてきたことである。こうした状況を改善するべく、2020年度のコロナ禍での試行錯誤をふまえ、2021年度は筆者が畿央大学

教育学部のベーシックセミナー及びキャリア形成セミナーを担当することとなった。その実践に先立って、初年次学生のなかにいかにして「学習への適応」と「社会への適応」を統合するのか、そして、どのようにベーシックセミナーとキャリア形成セミナーを体系化するのかという問題認識のもとで授業計画を設計した。

実践報告をはじめとして、日本の大学における初年次教育に関する先行研究はかなりの数に及ぶが、なかでも体系的な研究として主要なものには、濱名、川嶋による初年次教育の動向に関する研究¹⁾や河合塾の全国初年次教育調査に基づく調査報告と先進事例の紹介²⁾、それから山田による初年次教育とも関連させた学士課程における教育の質保証に関する研究³⁾などが挙げられる。2021年度前期の畿央大学教育学部におけるベーシックセミナー及びキャリア形成セミナーの授業設計にあたっては、これらの先行研究の知見を活用し教育目的・目標を定めるとともに、各回の授業内容を計画した。こうしたことをふまえて本報告では、初年次教育の政策的背景を整理したうえで、2021年度前期の畿央大学教育学部における初年次教育の具体的な内容と展開について検討することで、初年次教育がもつ意義と課題について明らかにすることを目的とする。なお、以下の議論においては、特筆しない限り畿央大

学教育学部におけるベーシックセミナーとキャリア形成セミナーは2021年度前期に実施したものをさすこととする。また、畿央大学教育学部の初年次教育には、もちろんベーシックセミナーとキャリア形成セミナー以外にも各種オリエンテーションや研修活動などが含まれるが、以下の議論において畿央大学教育学部の文脈で用いられる「初年次教育」とはこれら2つの授業科目をさすものとする。

以上をふまえて本報告では、まず、初年次教育の政策的背景と先行研究の検討を通じて初年次教育の実践の潮流について整理する（第1節）。そのうえで、畿央大学教育学部の初年次教育としてベーシックセミナーとキャリア形成セミナーを取り上げ、両科目の授業計画及び展開状況と初年次学生による授業評価の実態について検討する（第2節・第3節）。ここまでの議論をふまえて考察をおこない、畿央大学教育学部において初年次教育のもつ意義と今後の課題について明らかにする（第4節）。

1. 初年次教育の実践の潮流

それではまず、初年次教育の潮流として政策的背景と関連研究について検討することからはじめよう。本節では、初年次教育の展開過程と初年次教育の実践について類型化を図り、畿央大学教育学部における初年次教育の位置づけを明らかにする。

(1) 日本における初年次教育の特徴と政策的背景

初年次教育そのものの揺籃の地は戦前のアメリカに求められるが、日本の大学においてアメリカの実践をモデルとして初年次教育が本格的に展開されるようになるのは2000年代に入ってからである。よく知られているように、その背景には高等教育のユニバーサル化がもたらす大学教育への影響や中央教育審議会答申『学士課程の教育の構築に向けて』などの政策的要因が挙げられる。

初年次教育とは、山田によれば、大学の新生がスムーズに大学生活に適応できることを目的として、新生が能動的に関わる体験が提供され、教員主導ではない、学生主体の授業になるように教育方法が工夫された教育プログラムである⁴⁾。ただし同時に、初年次教育を字義通りに大学一回生が初年次に受講する教育プログラムとして完結させるのではなく、2年次、3年次、それから4年次への橋渡しとして位置づけ、主として4年間の学士課程全体のカリキュラムにおいて初年次教育を捉えることの必要性も指摘されている⁵⁾。つまり、初年次教育には高校から大学への学生の円滑

な移行を支援することに加えて、大学における4年間の学びのプロセス全体と有機的に関連づけられることが求められているのである。

また、初年次教育のプログラムとしての設計思想と到達目標をみてみれば、それはおおまかに次のようにまとめられる。すなわち、①大学生活に移行する際の支援、②基礎的な学術技術（いわゆる、アカデミック・スキル）の獲得、③キャンパス資源とオリエンテーション、④新生に対する自己感情・自己肯定感の向上の4点である⁶⁾。このように初年次教育の目的は、その実践を通じて学生が学業と大学生活の両方を充実して過ごせるように支えること、そして大学というコミュニティの一員であるという感覚を学生同士が共有できるようにすることに置かれている。

こうした特徴をもつ初年次教育が日本において積極的に取り組まれるようになった背景について、なかでも重要な転機として2008年に中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』の答申（以下、答申）が提示されたことが挙げられる。そして、このなかで参考指針として掲げられた「学士力」を学生が身につけていくために初年次教育の重要性が指摘されたのである。答申では具体的には、日本の高等教育就学率が50%を超え、Trowのいう高等教育のユニバーサル段階⁷⁾へと移行するなかで、全体として大学での学びに対する学生の目的意識の希薄化、学習意欲の低下、それから学生のありようの多様化が生じてきているとし、こうした大学が抱える教育課題についても指摘している。そのうえで答申では、改善方策として課題探究能力という「高等教育に相応しい高次の目標の達成に努める」ことを大学に求める一方で、基礎的な読解力や文章表現力などを修得させることや、問題意識を持たせ学習意欲を喚起するため地域や産業界との連携を深めたり、外部人材の積極的な参画を図ったりすることでより開かれた教育活動を実践することの重要性を強調している⁸⁾。加えて、答申では「レポート・論文などの文章技法」や「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」など、大学における初年次教育の取り組みを紹介しつつ、今後大学に期待される役割として、すでに述べたような課題を解決するべく初年次教育の導入・充実を図り学士課程全体のなかに適切に位置づけるとともに、大学生活への適応や大学で必要となる学習方法・技術の修得、ライフプラン・キャリアプランづくりの導入などの要素を体系化することが明示された⁹⁾。

このように2000年代を中心に日本の高等教育がユニバーサル段階へと移行し、学生のありようの多様化が生じる過程で、大学にはそれまで必ずしも明示的に求

められてこなかった役割が初年次教育を通じて要求されるようになっていく。

(2) 初年次教育研究の類型と本実践報告の位置づけ

こうした政策的背景のもとで、日本の大学では実態としてどのような初年次教育が展開されているのだろうか。また、本報告の事例である畿央大学教育学部ではいかなる初年次教育が構想されうるのだろうか。こうした問いについて考えるうえでは、大学における人材育成の目的をはじめとする教育理念や各種ポリシー、選抜性の高低を含む大学の位置づけ、教育を実践するうえでの教員の質や教員間のネットワークに関わる教育資源・制約など多様な条件を考慮しなくてはならない。とはいえ、初年次教育の内容のおおまかな方向性については、少々古い先行研究ではあるものの、

2006年刊行『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』において初年次教育プログラムの一定の類型化がなされている。具体的には表1に示す科目構成、初年次教育の目的、そしてプログラム内容の志向性の3つの視点に基づいて日本の大学における初年次教育の実践を類型化している。そこでは、初年次教育のタイプとして最も多くみられるのは「単独科目・学習適応・汎用性重視」型であると指摘されている¹⁰⁾。つまり、カリキュラムのなかに初年次教育を担う独立した単独科目を設置し、社会への適応を図ることよりも大学の学習で必要となるアカデミック・スキルの修得に重点を置き、学部学科での専門性や専門教育に規定されない「社会人として共通に求められる」「汎用性」を重視するタイプの初年次教育であると言える。

(表1) 初年次教育の類型枠組み

①科目構成	単独科目での実施/プログラムとしての複数科目での実施
②初年次教育の目的	学習への適応/社会への適応/学習及び社会への適応
③プログラム内容の志向性	「汎用性重視」(専門性に規定されない汎用的能力) / 「専門性重視」(学部学科の専門性や専門教育に規定される能力)

(出典) 濱名篤、川嶋太津夫『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』丸善株式会社、2006年、259頁に基づき筆者作成。

ただし、日本の初年次教育における萌芽期の実践的特徴に対し、近年では初年次教育の多様化が進行してきていることを指摘しておく。試みに、このことを初年次教育の実践報告や研究の量的変化を手がかりに、CiNiiの論文検索機能から裏づけてみよう。

まずCiNiiにおいて「初年次教育」をキーワードとして検索した結果を、論文等の出版年によって分類して示したものが表2である。表2から、初年次教育に関する研究は2000年代後半以降急激に増加してきており、初年次教育に関わる政策的な背景として2008年に答申が出されたこととも関わって、初年次教育に関する大学での実践への関心が高まってきていることがわかる。なお、その内容は大学での初年次教育に関する

思想や理念型の追求というよりも、初年次教育の実践報告や、FDの観点から実施される初年次教育の方法改善に関する量的な分析が多い¹¹⁾。

次いで、こうした初年次教育の研究に関する一般的な傾向をふまえて、CiNiiのキーワードに「初年次教育」と「キャリア」を入れて、論文等の検索結果を示したものが表3である。表3に示されるように、2001年から2010年の期間でヒットした件数は32件であるのに対し、2011年から2020年までの期間でヒットした件数は115件となっている。このことは、近年、初年次教育との関係においてキャリア教育を実践している大学での取り組みが増加していることを示唆しており、初年次教育においては大学卒業後のキャリア観や社会への

(表2) CiNiiにおける「初年次教育」論文検索の状況

出版期間	1980-2000	2001-2005	2006-2010	2011-2015	2016-2020
論文等件数	0件	51件	398件	715件	673件

(出典) CiNii より筆者作成。2021年11月11日検索。

(表3) CiNiiにおける「初年次教育」「キャリア」の論文検索の状況

出版期間	1980-2000	2001-2010	2011-2020
論文等件数	0件	32件	115件

(出典) CiNii より筆者作成。2021年11月11日検索。

適応に関する教育がいっそう重要視されるようになっていえる。

こうした近年の初年次教育の展開を表1の枠組みに照らしてみれば、日本の初年次教育の類型は多様化しており、初年次教育を担う科目群が拡大し大学と社会の接続により焦点があてられるようになっている。この点で、初年次教育においては従来のタイプに加え「複教科目での実施」、「社会への適応」、「汎用性重視」型のプログラムの類型も生じてきていると言える。実際としても、山田をはじめ近年の日本における初年次教育の多様化を論じている先行研究は多く存在する¹²⁾、新聞等においても「学習への適応」と「社会への適応」の双方を重視する私立大学での初年次教育に関するさまざまな取り組みが報じられている¹³⁾。

ここまでの論点をふまえて、とりわけ表1における「初年次教育の目的」についてみれば、畿央大学教育学部では初年次教育として「学習への適応」と「社会への適応」を両立させるための活動内容を計画した。具体的には、カリキュラム上、初年次教育のプログラムとして位置づけられるものの、コロナ禍のなかで2020年度は十分に体系的な初年次教育が必ずしもおこなわれてこなかったベーシックセミナーおよびキャリア形成セミナーの2つの科目について、それぞれ「学習への適応」と「社会への適応」という観点から再編成し、初年次教育を実施した。すなわち、おおまかにベーシックセミナーではアカデミック・スキルの修得を、キャリア形成セミナーでは職業観を形成しキャリアデザイン（進路）について考えることを目的として

授業を展開することとした。ただし、両科目の評価体制についてはルーブリック等を用いて学生の各資質の修得程度を厳密かつ客観的に評価するというよりは、これまで両科目では「合格」「不合格」という2つの評語による評価が実施されてきたこととも関わって、むしろ「向上目標」のようにあくまで学生個人内での学びの向上・深化を期待するという比較的ゆるやかな評価体制をとることとした。このこととも関連して、初年次教育の実践の過程では適宜課題を抱える学生に対して支援をおこなうという体制のもと一回生担任の教員団の関与がおこなわれたことを付言しておく。

第2節と第3節では、それぞれ「ベーシックセミナー」と「キャリア形成セミナー」に焦点をあて、教育計画と実践上の特徴、並びにこれらの授業最終日に実施した学生へのアンケートを手がかりに、各科目の初年次教育としての意義について検討する。

2. ベーシックセミナーの教育計画と展開

(1) ベーシックセミナーの概要と授業の展開

すでに述べたように、ベーシックセミナーでは2021年度前期15回の授業を通じて畿央大学教育学部の一回生（以下、初年次学生）193名を対象に論理的な文章の読み方・書き方に関する講義と演習を実施し、個々の学生に対し課題として小論文の執筆に取り組ませることで、初年次学生が大学生活において求められる基礎的なアカデミック・スキルを修得できるようにすることを目的とした。こうした教育目的のもとで設計し

(表4) ベーシックセミナーの授業計画 (2021年度前期木曜1限目)

回次	授業内容	回次	授業内容
1	オリエンテーション	9	論文作成のマナー③（批判的精読）
2	論理的な文章の書き方①	10	論文作成状況の確認とテーマ決定
3	論理的な文章の書き方②	11	論理的な文章を書くために①（アウトラインの作成の仕方）
4	Teams の活用	12	論理的な文章を書くために②（論証の仕方）
5	Teams の活用	13	小論文の作成
6	Teams の活用	14	発表資料の作成
7	論文作成のマナー①（問題意識の持ち方・文献の探し方）	15	小論文発表と評価会
8	論文作成のマナー②（論文の要約の仕方）		

（出典）筆者作成。

た授業計画を具体的に示せば、表4のようになる。表4における授業計画の流れは大きく、①論理的な文章の読み方・書き方に関する理解、②グループ単位での小論文のテーマの決定、③資料収集・要約・批判的検討の理解と実践、④個人による小論文作成、そして⑤グループ単位での小論文の成果発表にまとめられる。

ベーシックセミナーの授業の実践においてはおおまかに計画通りに進めることができたが、以下に、その授業体制について4点の補足进行しておこう。

第1に、授業の形態について、第1回から第3回（オリエンテーション及び論理的な文章に関する講義）、第10回（グループ単位でのここまでの授業の振り返りとテーマ決定）、第14回（発表資料作成のための打ち合わせ）、第15回（小論文の発表）の6回分の授業については、授業内容の特性に鑑みて対面方式で実施した。それ以外の授業では、コロナ禍での状況に鑑みて非対面方式を採用した。

第2に、とりわけ第7回から第9回の「論文作成のマナー」に関する授業、並びに第11回及び第12回の「論理的な文章を書くために」と題した授業では、オンデマンドの非対面方式の授業を通じて、小論文の執筆に必要とされるアカデミック・スキルに関する講義内容をレジュメと授業動画を通じて学生に提供するとともに、授業内容に関する課題を提示した。特に強調する

必要があるのは、非対面方式の授業ではそれぞれの課題に取り組むことが小論文の作成へと段階的につながるように設計したことである。このことにより、初年次学生は課題に取り組むモチベーションを高いレベルで維持するのみならず、小論文の執筆に比較的スムーズに移行することができたと言える。

第3に、小論文の執筆にあたって初年次学生が取り組むテーマは一回生の担任団に属する専門領域を異にする複数の教員が提示するようにし、学生は出席番号に基づいてグループごとに編成され、グループ単位で1つのテーマを選択するという方式を採用した。テーマについては、小学校分野、幼児教育分野など5つの分野に分類し、各分野にはさらに大きく5つのテーマを設定した。このうち一例として、小学校分野と幼児教育分野のテーマを示しておく（表5）。小論文のテーマには、コロナ禍が就学前及び初等教育の現場にいかにより多大な影響を与えているのかということや、学校教育の原理や運営的側面、教員の労働状況など、時事的かつ実践的な教育課題が設定された。なお、このように学生が取り組むテーマ自体は教員が設定したが、それらはあくまでもおおまかなテーマであり、学生が主体的に問題意識をもって資料収集を進めたり、自らの意見をもったりできるような一定程度の幅をもったテーマであったことを強調しておく。

（表5）ベーシックセミナーにおける小論文のテーマ例

小 学 校 分 野	<p>(1) 学級担任は「学習指導」と「学級経営」どちらに力を入れるべきか。</p> <p>(2) 学級担任が全科目を指導する小学校において、児童の学力向上のために、教科担任制を導入することが議論されていることについて、どう考えるか。</p> <p>(3) 学級担任には日々の日記帳や学習ノートなどの点検があり、休憩時間の児童との交流がある。両立するためにはどんな工夫ができるか。</p> <p>(4) いじめは起こしたくない。しかし起こる可能性が高い。適切な準備をするためにどんな考え方が必要か。</p> <p>(5) 学校では、新型コロナ感染の影響で多くの学校行事の中止や延期が検討されている。学級担任として修学旅行や運動会の中止を児童に伝えるとしたらどのようなことに配慮すべきか。</p>
幼 児 教 育 分 野	<p>(1) 子育てにスマートフォンは必要か？</p> <p>(2) 父親の育児休暇の取得を増やすには？</p> <p>(3) コロナ禍でのマスク保育の課題</p> <p>(4) 幼児教育の義務教育化は必要か？</p> <p>(5) 保育士・幼稚園教諭の労働環境の現状と改善策</p>

（出典）ベーシックセミナー小論文テーマ（資料）より、筆者作成。

そして第4に、小論文の執筆にあたっては卒業論文を執筆する際に用いるものと同様のフォーマットを使用し、章の構成、各章や節の書き出しなど具体的な文章の書き方を示す手引きも参考資料として提供した。実際として初年次学生が提出した小論文の多くはこの手引きに示される書き方をふまえたものであったと言えるが、初年次学生はそれぞれのテーマと問題関心のもとで小論文の執筆に取り組んでいた。具体的には、先行研究について批判的に文献調査をおこなっていたり、小論文の執筆期間が限定的であったにもかかわらず、フィールドワークをおこない「労働環境について詳しく述べるには実際に現場で働く保育者の実情や考えを知るべきである」という考えから、保育者への聞き取り調査を通じてその労働環境について検討したりする小論文も提出された。

加えて第5に、既に述べたように、ベーシックセミナーでは一回生の各担任による課題提出物の内容や小論文執筆に対する積極的な指導はおこなわなかった。すなわち、アカデミック・スキル修得の程度において初年次学生全体の底上げを図るという方針のもと、課題を抱える学生に対し必要に応じて支援・指導をするという体制で統一した。

このように、ベーシックセミナーでは全体として所期の目的は達成されたと言えるが、小論文の執筆を通じて初年次学生の主体的かつ積極的な取り組みが確認されたことは学生の成長ないし変容という視点から特に強調しておく必要がある。

(2) ベーシックセミナーに対する初年次学生の評価

それでは、ベーシックセミナーの授業を通じて、初年次学生はどの程度アカデミック・スキルを身に付けることができたと感じているのだろうか。また、コロナ禍における対面・非対面の両方式を取り入れた初めての体系的なベーシックセミナーの試みに対し、初年次学生はどのような感想を抱いたのだろうか。本項では、ベーシックセミナー第15回に初年次教育の総括という位置づけで実施した期末アンケートを手がかりに、その結果について検討する。

ベーシックセミナーの期末アンケートの概要について、それは大きくアカデミック・スキル修得の程度に関する自己認識についての質問とベーシックセミナーでの学び全体に関わる自由記述の大きく2つの項目からなる。このうち、具体的な質問内容は(1)「論理的な文章とは何か、その構造について理解できた」、(2)「論理的に文章を読むことができるようになった」、(3)「論理的に文章を書けるようになった」の3つとした。また、質問項目に対する回答数は(1)及び(2)が194、(3)が193であり¹⁴⁾、自由記述欄には、第3節で検討するキャリア形成セミナーと混同したため、キャリア形成セミナーに関する意見を述べている学生が数名程度存在していたことについては留意が必要である¹⁵⁾。期末アンケートの結果を示したものが表6である。表6からは、大きく次の3つの点が明らかになる。

(表6) ベーシックセミナーに関する学期末アンケートの結果

	1. そうは思わない	2	3	4	5.強く思う
論理的な文章とは何か、その構造について理解できた	0 (0)	10 (5)	36 (18)	106 (54)	42 (21)
論理的な文章を読むことができるようになった	3 (1)	9 (4)	63 (32)	87 (44)	32 (16)
論理的に文章を書けるようになった	8 (4)	13 (6)	63 (32)	83 (43)	26 (13)

(出典) ベーシックセミナー期末アンケートに基づき、筆者作成。

(注) 単位は人。カッコ内は% (小数点第3位以下切り捨て)。

第1に、全体の75%以上の初年次学生が「論理的な文章とは何か」についてその構造を理解していると肯定的な回答をしている (42+106:148回答)。

ただし第2に、論理的な文章に関する理解をふまえ

て、そうした文章を読むスキル (148⇒119)、さらには自分で書くスキル (148⇒109) についての回答では肯定的な意見は減少している。また、後者の2つのスキルを比べると、論理的な文章を書くスキルにおいて

わずかに肯定的な意見の減少が認められる。

そして第3に、それでもなお大づかみに全体の傾向をみてみれば、過半数の初年次学生が論理的な文章を読むスキル、書くスキルの修得において「5.強くそう思う」及び次点の4を選択しており、肯定的な意見を抱えていることがわかる。これらのスキルに関しては、その修得について「強くそう思う」と「そうは思わない」の中間に位置する「3」の回答が63人と相対的に多くなっていることに注意する必要があるが、おおまかには期末アンケートの結果から所期の目的が一定程度達成されたと言える。

次いで、ベーシックセミナーに関する自由記述欄の感想についても検討する。全体としては肯定的な意見が多数を占めた。否定的な意見についても全体としての教育目的そのものを否定するというよりは、よりよい授業にするための改善点を指摘するといった建設的な意見が多数を占めた。具体的に、肯定的な意見のなかでも授業を通じて「成長」や「達成感」・「満足感」につながったとする感想には以下のものがある。

- ☆ 授業の当初は「論理的」ということに関して、苦手意識がありましたが、授業を受けるにつれて少しずつ論理的な文章を読むことや書くことに苦手意識が無くなっていきました。また、小論文を書くことを通して得たものは非常に多いと思います。
- ☆ 15回の授業を通して、論理的な文章の読み方、書き方について深く知ることができ、また、最後には小論文を自分で作り、それをグループごとにプレゼンテーションをするということをする中で、知識としてたくさんのものを得れたと思います。課題が多く、毎週課題に追われることが多々ありましたが、小論文を作り終えた後には、達成感と満足感がとてもありました。(略)
- ☆ 15回の授業を通して、小論文を作成し班で協力して発表することで以前よりはアカデミック・スキルが修得できたと感じる。また、多くの意見に触れることができて面白かった。まだまだ論理的な文章を読んだり、書いたりすることが十分にできているとは言えないが少しは成長できたと思う。

また、第1節で述べたような初年次教育の意義からみたとき、初年次教育そのものの目的の達成につながったと考えられる興味深い意見もある(傍点筆者)。

- ☆ 一回生の前期のうちに受けることができて良かったと思った。

- ☆ 頭の中の思考が高校生の時から大人の思考に変わったなと思った。
- ☆ 論理的に文章を読み、実際に書くという事を行って、完璧にできていたかはわかりませんが、四月の最初に比べたら、だいぶ成長できたと思う。この講義がほかの授業のレポート作成の際の参考になっていると気付きました。学ぶことから背を向けることが一番いけないことだと思いました。

加えて、ベーシックセミナーのあり方の改善を求める意見としては、課題の量や質に関する改善点や文章の読み書きに関する演習の必要性を指摘する意見があった。

- ☆ 難題な課題が多かった。もっと課題に対する説明やどうすればよいかのサポートが欲しかった。
- ☆ 授業で話を聞くだけではなく、授業中に文章を書く練習をしたり論理的に文章を読む練習をしたりしたほうがより理解が深まると思いました。

このように全体としてみれば、初年次生の過半数は論理的な文章の構造について理解し、その読み書きについてもある程度修得することができたと感じており、この意味でベーシックセミナーの所期の目的を達成することにつながったと言える。ただし、アカデミック・スキルが身に付いたかどうかははっきりと認識できていない学生も一定数存在しているし、それとも関わって授業実践の具体的な方法については改めて検討しなくてはならないだろう。これらの点については考察において再度検討することとして、次節ではキャリア形成セミナーの実践について検討する。

3. キャリア形成セミナーの教育計画と展開

(1) キャリア形成セミナーの概要と授業の展開

キャリア形成セミナーでは、2021年度前期における15回の授業を通じて初年次学生193名を対象に、高校生活から畿央大学での生活と学修活動への移行を支えらるとともに、将来の生き方を自ら決定していくためのキャリアデザインについて初年次学生が幅広い知識を持つことができるようにすることを目的とした。とりわけ授業計画の後半部分では、こうした目的との関連から教職をはじめ様々な産業領域の実態について理解を深めるため、畿央大学の教採・公務員対策室やキャリアセンターに加えて、一般企業等からも講師を招聘しさまざまな角度から講義を実施した。答申においても言及されているように、初年次教育では目的意識が

希薄な初年次学生に対し、主体的に学習に取り組んだり進路の展望を持てるようにしたりすることが企図されている。しかしながら、畿央大学教育学部の場合では教職を中心に入学時にすでにキャリアの方向性がある程度有している学生が多数を占めていることから、本授業計画の作成段階においては、むしろそうした学生の「職業に関する視野をいかにして広げるか」ということを重視した。

こうした目的のもとで設計したキャリア形成セミ

ナーの授業計画を具体的に示せば、表7のようなになる。表7において授業計画の流れは大きく、①大学生としてのアイデンティティの獲得及び大学生活への移行に関わる支援、②ICTの活用(Microsoft Teams)とコミュニケーションの実践、③教職をめぐる現状と畿央大学の就職状況の理解、④教職以外の一般の就職活動や第一次産業から第三次・四次産業までの各産業の状況についての理解の4項目にまとめられる。

(表7) キャリア形成セミナーの授業計画 (2021年度前期木曜2限目)

回次	授業内容	回次	授業内容
1	オリエンテーション (建学の理念、メール等のマナーの共有)	9	幼児教育の現状について
2	将来設計に関する文章の作成	10	教職員支援の現状
3	大学生活と健康管理	11	就職活動について
4	Teams の活用①	12	第一次産業の現状
5	Teams の活用②	13	第二次産業の現状
6	Teams の活用③	14	第三次・四次産業の現状
7	人間関係・コミュニケーション	15	ベーシックセミナーに振り替え
8	学校教育の現状について		

(出典) 筆者作成。

キャリア形成セミナーの授業は、おおまかに授業計画通りに進めることができたが、以下、本授業の特徴について3点の補足しておく。

第1に、授業の形態について、コロナ禍での大学生活全般において求められる非対面でのコミュニケーションを前提としてTeamsの活用慣れを主眼とした第4回から6回までの授業、それから後述する第13回の授業を除き、キャリア形成セミナーは原則として対面方式で授業を実施した。

第2に、キャリア形成セミナーの授業はオムニバス形式を採っており、授業の内容ごとに各分野に通暁した学内外の講師に依頼して授業を実施した。とりわけキャリアデザインとの関係から強調しておきたいのは、第8回、第9回、第11回は畿央大学内部の教採・公務員対策室やキャリアセンターの職員に講義を依頼したが、第10回は独立行政法人教職員支援機構職員、第12回は広島市の自営農家、第13回はホンダ・エアクラフト・カンパニー社員 (Zoomを使用しアメリカからリアルタイムで質疑を実施)、そして第14回は総合コンサルティング企業社員によって講義がおこなわれたことである。

そして第3に、外部講師による講義では、講義終了

後に初年次学生に対し授業の感想を自由に記述させ、感想文を集約してから各講師に送付した。外部講師による授業の感想をみると、当然のことながら外部講師自身が直接目を通すものである以上は、授業に対して肯定的な意見が多くなりうると推察されるものの、実際としても極めて多くの肯定的な意見が確認された。具体的には、必ずしも教育学と関わっているわけではない分野に関する講義から知識を獲得し、転職も含む働き方の多様なありようについて学ぶことの意義を強調する意見が多く存在した。以下に、その一例として第13回の授業を受けて作成された感想文の内容を抄記してみよう。

☆ 私は今回の講義を聞き、人の可能性は制限がないということを改めて実感しました。私は今、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の資格を取ろうと考えていますが、大学の授業で教員とはどのようなのか学ぶにつれて自分にこの仕事ができるのか、向いているのか、続けられるのかと不安に感じ、なりたいたと言える職業がはっきりと言えなくなっていました。しかし、この講義で失敗したとしても道がないわけではなく、日本だけでなく海外も

視野に入れて幅広く物事を捉えられるようになりたいと感じ、考え方が少し変わりました。今までは教員になるということだけを視野に進んできましたが、それに関係なかったとしても資格を取ってみたり、他の仕事を経験したりすることも重要なことだと感じました。

一例ではあるものの、こうした感想からは外部講師による講義を通じてキャリアデザインに関わる学生の「職業に関する視野をいかにして広げるか」という所期の目的を達成することができたと言える。そして次項でみるように、キャリア形成セミナーにおける外部講師による授業を肯定的に捉えている学生は極めて多くなっているのである。

(2) キャリア形成セミナーに対する初年次学生の評価

それでは、主としてキャリアデザインについて幅広い知識を持つことを目的としたキャリア形成セミナー全体の授業を通じ、初年次学生はどの程度自身の進路について方向を明確化することができたと感じているのだろうか。また、上記の感想文の内容とも関わって、

初年次学生は教育学や教職との関わりが相対的に希薄な他の領域・職種に関する講義を聞くことについてどのような感想を抱いたのだろうか。本項では、ベーシックセミナーへと振り替えた第15回において初年次教育の総括という位置づけで実施した期末アンケートを手がかりに、その結果について検討する。

キャリア形成セミナーのアンケートの概要について、それは大きくキャリアデザインに関する自己認識や他の職種・産業領域の講義の有用性に関する質問とキャリア形成セミナーでの学び全体に関わる自由記述の2つの項目からなる。このうち、質問の内容について具体的にみれば、(1) 将来希望する進路をより明確に決めることができた、(2) 自分には希望する進路があるが、他の職種に関する講義を聞くことは有意義だった、そして(3) 第一次産業～第三次産業に関わる外部講師による講義は有意義だった、の3つである。また、質問項目に対する回答数は(1)及び(2)が186、(3)が184であり、自由記述欄では169人によるキャリア形成セミナーに対する意見が確認された。キャリア形成セミナーの期末アンケートの結果を示したものが表8である。

(表8) キャリア形成セミナーに関する学期末アンケートの結果

	1. そうは思わない	2	3	4	5.強くそう思う
将来希望する進路をより明確に決めることができた	4 (2)	9 (4)	39 (20)	74 (39)	60 (32)
自分には希望する進路があるが、他の職種に関する講義を聞くことは有意義だった	4 (2)	4 (2)	23 (12)	57 (30)	98 (52)
第一次産業～第三次産業に関わる外部講師による講義は有意義だった	1 (0)	7 (3)	32 (17)	67 (36)	79 (42)

(出典) キャリア形成セミナー期末アンケートに基づき、筆者作成。

(注) 単位は人。ただし、カッコ内は% (小数点第3位以下切り捨て)。

表8からは、大きく次の3つの点が明らかになる。第1に、進路の見通しとしてのキャリアデザインについてはキャリア形成セミナーの授業を通じて「より明確に決めることができた」という問いに「5. 強くそう思う」と回答した初年次学生は60人であり、次点の4を含めると、回答者全体の3分の2以上(134人)が肯定的な回答をしていた。

第2に、希望する進路をもったうえで他の職種に関する講義を聞くことの意義については、過半数の初年次学生が「5.強くそう思う」と回答しており、次点の

4を含めると、大多数の初年次学生(155人)が肯定的な意見をもってその意義を認めている。

そして第3に、第一次産業から第三次・第四次産業に関する講義では、各産業領域で働く講師が当該産業の現状や変化の動向、転職を含めた講師自身のキャリア経験や失敗談など広範な角度から「働くということ」について講義を実施したが、こうした外部講師による講義に対しても初年次学生の全体の4分の3以上が「5.強くそう思う」及び次点の4と回答している。この点で、初年次学生は各産業領域に関する外部講師によ

る講義を肯定的に捉え、その意義を認めていることがわかる。こうして期末アンケートの結果をみれば、キャリアデザインについて初年次学生が幅広い知識をもつことができるようにするという所期の目的が一定程度達成されたものと言える。

次いで、キャリア形成セミナー全体に関する自由記述欄について検討する。キャリア形成セミナーの感想等についての自由記述をみても、全体として評価がとても高いと言え、極めて多くの肯定的な感想を確認することができる。そのうえで、初年次学生の自由記述からは大きく他の職種を知ったうえで教職に進みたいと考える「教職路線堅持型」と、少数ではあるものの「非教職検討型」の2つのタイプに学生の感想を分類できる。各タイプに分類される学生の感想を具体的に紹介すれば、以下ようになる。

まず「教職路線堅持型」では、次に示す2人の初年次学生の感想に代表されるように、将来教職に就くにあたり学校教育を取り巻く社会の状況を知ることや、それにより自分自身の視野が広がることにつながったことを評価するものが確認できる。こうした学生の感想からは、キャリア形成セミナーの講義を受ける過程において教職以外の職種に対する意識や関心が肯定的な方向で変化したことがわかる。

- ☆ 保育士などの教育者の道しか考えていなかったから他の職種のことなど最初は全然興味がなかったけど、様々な先生や講師の方のお話を聞き保育士という教育者の道に進むことは変わらないけど視野がとても広がった気がした。また物事の捉える視点も変わった気がした。
- ☆ 教師になるにあたって、教職の知識以外を知ること、保護者や学校を取り巻く環境の理解を深められると思うのでとても為になりました。

また、教職に進むことを志向しながらも、教員になった際に関わりをもつであろう「すべての子供」が「教育の道に進むということはほとんど」ないと考えられるため、「教育以外の他の視線から社会を見ていくことが必要だと感じていた」とする学生や、実態として教員養成を軸とする畿央大学教育学部の教職専門的なありように対して、入学前から「視野が狭くなる」ことを危惧していたとする学生の声も確認された。こうした学生にとっても、教職に限定されないさまざまな職種に関する講義に参加することは一定程度有用であったと言える。

- ☆ 私は将来教員として学校で働きたいと思っています

す。現在教育学部に所属しており、アルバイトは塾の講師をしています。正直学校、教育のことしかわかっていないような状態です。将来教師になって生徒を指導するとして、すべての子供が教育の道に進むということはほとんどありません。そういった中で教育以外の他の視線から社会を見ていくことが必要だと感じていたので、私は今回の授業はすごく有意義なものと感じました。

- ☆ (畿央大学は) 専門的な大学だからこそ、将来の視野が狭くなるのが入学前からの不安だったので、様々な職種の方の話を聞けたことはとても有意義な授業でした。

一方、「非教職検討型」の学生においても、キャリア形成セミナーの外部講師による講義を通じて「視野が広がるきっかけになった」と評価する声は多い。とりわけ「教職という形にこだわらず様々な職業に目を向けてみよう」という感想はキャリア形成セミナーの所期の目的に位置づけた際に象徴的なものである。

- ☆ この授業を通して視野を広く持つことが出来、教職という形にこだわらず様々な職業に目を向けてみようと思った。また、多くの経験を積み、有意義な生活を送りたいと思えたので、私にとってこの授業はとても刺激的な良い授業だった。
- ☆ 今回様々な業種のお話を聞いて、自分の世の中を見る視野が広がったと感じました。正直自分が、教師に本当になりたいのか迷っている状況なので、これからもほかの仕事について調べながら、自分がしたいことを探していきたいと思いました。

こうして初年次学生による外部講師の授業への感想文、そして自由記述を含む期末アンケートの結果をみると、総評として、いずれのタイプの学生にせよ、キャリア形成セミナーでは多くの初年次学生が教職以外の進路の可能性もあるという認識や、教職に進む場合でも学生の視野を広げ、多様なキャリアのありようを理解することの重要性を初年次学生に提起することができたとまとめられる。

4. 考察

これまでの検討をふまえて、日本の大学において初年次教育が求められるようになっている社会的背景と、そのもとで2021年度前期畿央大学教育学部の初年次教育として実施したベーシックセミナー及びキャリ

ア形成セミナーの実践における意義について改めてまとめれば、次のようになるだろう。

初年次教育が求められるようになった背景としては、2000年代に入り日本の高等教育がユニバーサル段階へと移行するなかで、目的意識の希薄化や学習意欲の低下など、さまざまな課題をもつ多様な学生への対応が大学全体として求められるようになったことが挙げられる。具体的に答申では、2008年の答申を通じて新入生の大学生活への適応や学習方法・技術などアカデミック・スキルの修得、そしてライフプランやキャリアデザインなどの諸要素を大学のカリキュラムのなかで体系化することが明示された。こうした流れを受けて、現在では大学における初年次教育には多様な実践が確認できるものの、大きくそれが目指すところは大学における「学習への適応」と「社会への適応」の2点に集約できる。

このことをふまえて、2021年度前期の畿央大学教育学部において実施した初年次教育では、ベーシックセミナーでは「学習への適応」、すなわちアカデミック・スキルの修得を、キャリア形成セミナーでは「社会への適応」、すなわち職業観を形成し、キャリアデザインについて考えることを目的としてそれぞれ授業計画を編成した。このうち、ベーシックセミナーについて第15回に実施したアンケート結果に基づけば、アカデミック・スキルに関する知識としては、授業全体を通じて多くの学生が論理的な文章の構造について理解することができたと言ってよい。また、それを実際に使いこなせるかどうかというスキルの面では、過半数の学生はある程度修得できたと感じていた。

ベーシックセミナーの内容的特徴であった小論文の執筆及びグループでの発表という視点からみれば、これらの作業を通じて多くの学生は困難と同時に「達成感」や「満足感」を得ることができた。また、論文執筆の過程で「多くの意見に触れることができて面白かった」とする意見からは、ベーシックセミナーを通じて大学での学びはおもしろいものであるという体験の機会を提示することができたと言えるだろう。とりわけ、提出された小論文のなかにはフィールドワークを通じて入手した現場の保育者の声をもとに議論を展開しているものがあったことは特に強調する必要がある。具体的に当該小論文から調査方法を引用すると、「①身近の保育経験のある人をリスト化する。②リストアップした人に調査について説明・交渉する。③調査の協力に承諾していただけた方に具体的な内容のデータを送信する。④送信したデータに協力者の意見や考え・実情を入力した新たなデータを送信してもらう」¹⁶⁾とあり、ここからは情報源へのアクセス、い

かに学ぶかという方法論に関する自主的な学びや実践がおこなわれていたと評価することができる。

加えて、小論文の内容に関するPPTを用いた発表では、グループごとに構成員の各小論文の内容を個別に発表するという方式が大半を占めたが、なかには各小論文で明らかにしたことを統合し、それを1つの問題関心のもとで編成し直し、その問いに対する答えを用意したグループも存在していた。このことから、グループ間での創造的な対話の前提として十分なコミュニケーションがおこなわれていたことが推察される。

他方、キャリア形成セミナーでは、第15回に実施したアンケート結果から多くの学生（134人）が卒業後の進路ないしキャリアの見通しをもつことができていることが示された。また、多様な職種に対する理解や第一次産業から第三次・四次産業に至る各産業領域に関する理解についても、視野を広げるという観点から大多数の学生がその意義を肯定的に評価していることがわかった。キャリア形成セミナーの外部講師等による授業を通じて学生に対してさまざまなキャリアの可能性を提示していくことは、畿央大学教育学部に入学する時点において教職というキャリアとの関連から視野が狭くなることを危惧する学生にとって一定の「処方箋」となりうる。

一般に、私立大学のなかでも長い歴史をもたない機関にとってその存立と発展を図るための課題は、いかにして地域社会から「正統性（legitimacy）」を獲得していくかにある¹⁷⁾。こうした観点からみると、教育学部及び健康科学部の2学部によって構成される畿央大学の場合、1つには、教職課程を通じてより多くの学校教員を輩出することが地域社会への貢献となるのみならず、「正統な大学である」と地域社会（高等学校関係者や保護者、地域住民等）によって認知され、そのことが受験生や入学者という形で大学の存立基盤（財源）を獲得することにつながると考えられる。

このように畿央大学にとって教員養成をおこない教員を輩出することはライフラインであると言えるものの、それと同時に、上記のような必ずしも教職をめざさない初年次学生に対するサポートの体制も必要である。この意味で、キャリア形成セミナーは教職を志向する学生及び必ずしもそうとは言えない学生のいずれのタイプの学生に対してもキャリアに関する視野を広げることにつながり、初年次学生が多角的に現代社会を捉えるための契機を提供することができた。

以上をまとめれば、ベーシックセミナー及びキャリア形成セミナーからなる畿央大学教育学部の初年次教育を通じて、初年次学生は「学習への適応」として論理的な文章に関する知識やスキルについて実践を通じ

て学ぶとともに、「社会への適応」として将来的な進路を考えるうえで視野を広げ、多様なキャリアについて一定程度の知識を獲得することができたと総括できる。ただし同時に、こうした教育の実践に関する評価と同様に重要なことは、畿央大学教育学部における初年次教育のさらなる改善のために課題を提起することである。そうした課題について述べれば、大きく次の3点にまとめられる。

第1に、マクロな視点からは、畿央大学教育学部の全体のカリキュラムにおける初年次教育の位置づけについて検討する必要がある。初年次教育を学生が初年次に受講するプログラムとして完結させず2回生から3回生にいたる過程のなかに位置づけていくことの重要性は第1節で述べたとおりだが、学士課程全体を通じて初年次教育での学習したことがらを他の科目や演習と有機的に関連づけることが重要となる。ベーシックセミナーについて言えば、当然のことではあるが、必ずしも15回のベーシックセミナーだけでアカデミック・スキルの修得は完結するものではなく、各教科や3回生次に配属されるゼミでの演習を通じて学生各々がそうしたスキルへの習熟を図っていくことが期待される。また、具体的な方策としては、2回生以上を対象とするアカデミック・スキルに関するフォローアップ講座のように継続的な学びの機会を提供したり、ベーシックセミナーの授業内容を独自のテキストとしてまとめたりすることにより、そのいっそうの体系化を図っていくことなどが考えられる。

第2に、ミクロな視点からは、ベーシックセミナー及びキャリア形成セミナーの各内容についてよりよいものとするために改めて検討することである。ベーシックセミナーについて期末アンケートでは、「論理的な文章に関しての授業で内容が難しくもう一度授業を受けたい」、「短い文章でいいから、もっと実践的な練習を取り入れたほうがいいのではないかと思います」という声も確認されたため、各回の授業内容及び課題の内容や分量についてはあらためて検討する必要がある。特にベーシックセミナーはコロナ禍での対応として主として非対面方式（動画視聴、レジュメの通読と自習及び課題の提出）で実施したが、期末アンケートからはこうした方式の有効性が一定程度示されたと言えるため、コロナ禍が収束した後もこうした方式を積極的に継続させることについては前向きに検討していく必要があるだろう。

そして第3に、第2の点と同様にミクロな視点からは、キャリア形成セミナーの授業体制について各回の感想文や期末アンケートからは一連の外部講師による授業の有効性や意義を認めることができるため、今後もこ

うした方向性を維持するとともに、さらなる工夫が必要になる。具体的には、学生の「視野を広げる」ことも関わって、現代社会を俯瞰するような大所高所からの講義を外部の適当な人物に依頼したり、グローバル化が進展し国家間のさまざまな問題が生じるなかで、現代の国際社会を理解するため諸外国の研究者にオンラインでのより臨場感のある授業を初年次学生に提供したりすることなどが想定される。そのためにはキャリア形成セミナーの目的を精緻化し、畿央大学や各教員のネットワークを活用することで外部講師を確保するとともに、持続可能な方式でそうした外部講師陣と畿央大学とをつなぐ仕組みを確立することが課題となる。

おわりに

本報告では、畿央大学教育学部における初年次教育の実践について、初年次教育の政策的背景を整理したうえで、2021年度前期の初年次教育の具体的な内容と展開について検討し、畿央大学教育学部において初年次教育がもつ意義と課題について明らかにすることを目的とした。初年次教育の意義に関する検討にあたっては、主として初年次学生が回答したアンケート調査の結果を使用した。検討の結果、畿央大学教育学部の初年次教育を通じて、初年次学生の多くは「学習への適応」という観点からはベーシックセミナーにおいて論理的な文章に関する知識やスキルについて実践を通じて学ぶとともに、「社会への適応」という観点からはキャリア形成セミナーを通じて将来的な進路を考えるうえで視野を広げ、職業観について一定程度の知識や多様な見方を獲得できたと言える。こうした結果から、初年次教育設計時の理念に立ち戻れば、おおまかには教育の目的や内容は妥当なものであったと言えるものの、ベーシックセミナー、キャリア形成セミナーともに、その教育内容については改善の余地が残されている。また、「開放制」の原理のもとで「大学」において教員養成をおこなうということの意味をあらためて考えながら、初年次教育の目的を設計し実践していくことも重要である。

最後に本報告の課題として、本報告は主としてアンケート調査の結果に基づきながら検討を進めてきた。今後は初年次教育の目的と関連させた指標を設け統計的な分析をしたり、一回のみのアンケートだけではなく複数回実施することで学生の意識・能力の変容過程を検討したりするなど、より妥当性の高い方法で検討を進めることが肝要であろう。この点を今後の課題として、畿央大学におけるよりよい初年次教育の実践に

について考えていきたい。

謝辞

畿央大学教育学部における2021年度前期初年次教育（ベーシックセミナー及びキャリア形成セミナー）の企画・実施にあたっては、一回生担任の先生方をはじめとして多くの先生方のご支援をいただいた。なかでも、一回生担任団の代表を務められた竹下幸男先生と担任団の一人である塩原佳典先生にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げたい。また、各回においてキャリア形成セミナー外部講師を引き受けていただいた長谷川哲也氏（独立行政法人教職員支援機構）、宇根大貴氏（UNEファーム）、三宅宣彰氏（ホンダエアクラフトカンパニー）、高木孝介氏（総合コンサルティング会社）にも感謝の辞を述べるとともに、引き続いてのお力添えをいただきたい。

文献・注

- 1) 濱名篤, 川嶋太津夫: 初年次教育-歴史・理論・実践と世界の動向, 丸善株式会社, 2006
- 2) 河合塾: 初年次教育でなぜ学生が成長するのか-全国大学調査からみえてきたこと, 東信堂, 2010
- 3) 山田礼子: 学士課程教育の質保証へむけて-学生調査と初年次教育からみえてきたもの, 東信堂, 2012
- 4) 同上書, 3-4
- 5) 同上書, 4
- 6) 同上書, 4-5
- 7) トロウによれば、ユニバーサル型の教育は、従来と比べてはるかに広範な「学生層」にも接近可能な新しい教育形態と、きわめて多彩な「学力基準」によって特徴づけられるとされる（トロウ、マーチン（著）、天野郁夫、喜多村和之（訳）：高学歴社会の大学-エリートからマスへ、東京大学出版会、15, 1976）
- 8) 中央教育審議会: 学士課程教育の構築に向けて（答申）、15, 2008
- 9) 同上文書, 35
- 10) 前掲書1）、259
- 11) 実際として2016年から2020年の期間で出版された初年次教育に関する論文等文献について、CiNiiにおいてキーワードに「初年次教育」と「理論」を入れて検索すると10件、「初年次教育」と「思想」で検索すると3件がヒットするに過ぎないのに対し、「初年次教育」と「実践」では151件、「初年次教育」と「方法」では54件がヒットする。
- 12) 前掲書3）、186
- 13) 日経新聞: 2021年9月15日（朝刊）
- 14) 複数回、回答をおこなった学生がいるものと推察される。
- 15) こうした混同の原因は、シラバス等においてキャリア形成セミナーが木曜日1限目、ベーシックセミナーが同2限目の実施として規定されていたのに対し、実際は順序を逆にして運用したことであると考えられる。
- 16) 畿央大学教育学部学生A: 現代の保育者の労働環境の実情と解決案（第13回ベーシックセミナー提出課題）、2021, 1-5
- 17) Snejana Slantcheva and Daniel C.Levy: Private Higher Education in Post-Communist Europe. NY, Palgrave macmillan, 157-178, 2007では、ロシアなどの体制移行国を取り上げて、従来の国家体制では認められていなかった私立大学が発展するためは、市場や国家などの特定の主体からいかにして私立大学が「正統性」を獲得していくかが必要であるとされるが、こうした視点は日本の私立大学に対しても援用できるものと考ええる。

